

短大生における母性意識

久保田 君枝

The Maternal Recognition of Junior College Students

Kimie KUBOTA

I はじめに

従来、母性は多くの人をもって生まれた本能であって、女性であれば子を持ちさえすれば、その本能がどのような条件下にあっても、あふれでてくるのが「正常」であるというイメージをもたれている。

母性は子を生き育てる女性の天分であり、女性は生まれながらにして、その萌芽をもっている。母性は本来動物的なもの、本能的なもので、先天的な特性であり、一般的に子供が生まれたあとに子供に対する責任感として生ずる父性とは異なる。また、母性は社会学的、生理学的、感情的な統一体としての母と子に対する関係を示すものであり、受胎とともに始まり、その後の妊娠出産、育児の過程を通して成長発達していくが、これには感情的反応が伴い、またある程度は種族に共通する一面、大部分は個人的多様性をみるものであるとされている。すなわち母性は母子関係においてとらえられる母としてのパーソナリティの一面であり、妊娠、出産、育児などの経験によって形成されるものである。したがって母性の形成には、母性意識の成立と母性行動の発達などが中心となり、その形成要因には身体的および社会的要因に関係があるとされている。母性意識の形成には幼少期のか弱い物への思いやりや思春期、成熟期における育児体験が母性意識の発達に影響するといわれている。

一方母親のその子に対する愛着感としての母性感情もあり、母性感情は妊娠や育児の経過に伴って変容するものとされている。すなわち妊娠を自覚することによって胎児に対する愛着感が芽生え、出産によって新生児、乳児に対する育児経験とともに発達するものと考えられている。

そこで、看護学科の学生と文化教養学科の学生の「母親役割観と子どもに対する感情」を調査することにより、母親予備群の母性意識を知りたいと考えた。また、母性意識は後天的に環境要因の影響を受けやすいことから、母親予備群の母親の母性意識を知ることにより世代差を知りたいと考えこの調査を行った。

II 母性意識についての調査

1 調査の目的

- 1)短大生の伝統的母親役割観について調べる。
- 2)短大生とその母親の母親役割観との比較を行う。
- 3)短大生の母親役割観と子どもへの感情の関係をみる。

2 方法

1)対象

K短期大学の文化教養学科の女子学生1～2年生62名と看護学科1～2年生55名。

2)調査内容

(1)母性意識に関する項目

花沢成一¹⁾による「母性意識質問紙」を使用した。理由は①質問項目の内容が、高校生程度の学力で理解できるものであること、また回答形式もできるだけ単純であること。②対象が未婚者から既婚者まで使用できること。

(A) 伝統的な母親役割観を肯定する内容の項目（各質問項目の回答は5段階法で行った）

- 1 妊娠は、女にとってすばらしい出来事である
- 2 赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である
- 4 赤ちゃんを産んでからはじめて、子どものかわいさがわかる
- 5 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみもがまんできる
- 7 女は子どもを産むことで、自分が生きた証拠を残すことができる
- 8 どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである
- 10 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである
- 11 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる
- 13 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である
- 14 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる
- 16 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない
- 17 子どもがいることで、家庭生活はより楽しくなる
- 19 わが子の成長をみとどけるために、長生きをしなければならぬ
- 20 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である
- 22 わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる
- 23 子どもを育てるのは、生みの母が最良である
- 25 わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活に張りが出る
- 26 育児に専念したいというのが、女の本音である

(B) 伝統的な母親役割観を否定する項目（逆転項目）

- 3 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである
- 6 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは、不公平である
- 9 予定していない妊娠の場合は、人口中絶もやむを得ない
- 12 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらぬほうがよい
- 15 わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである
- 18 育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である
- 21 育児に追われていると、若さが早く失われる
- 24 育児から開放される時に、人間らしい自由な生活ができる
- 27 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている

(2)子どもに対する感情

大日向⁴⁾による「母性意識質問紙」を使用した。理由は①子どもを自分のどこに位置づけ、子どもに対していかなる距離感をもって接しているかという視点から作成されていること。②質問項目の内容が回答しやすく単純であり、育児経験のない者でも回答できること。

(A) 子どもへの密着化傾向を示す項目（各質問項目の回答は4段階法で行った）

- 1 子どものためなら、たいていのことは我慢できる
- 2 子どもをみていると、まだあぶなかくして自分がそばにいてやらねばと思う
- 4 子どものためならどんなことでもするつもりでいる
- 5 子どもが赤ちゃんだった頃が、たまらなく懐かしい
- 7 子どものために自分が何をしてやれるかを考えることは楽しい
- 8 子どもが親元を離れていくことは、親として寂しいことである
- 10 母親の自分がいちばん良いと思う教育を子どもに伝えたい
- 11 子どもは自分の体の一部のように思う
- 14 いつまでもあどけなく子どもっぽくいてほしい

(B) 子どもの自立を促し、客観的なかわりを志向する項目

- 3 子どもをみていると、自分が産んだ子というよりは別の一人の人間という感じがする
- 6 わが子といえども、自分のおもいどおりにいかないことも多いものだと思う
- 9 子どもに対しては、親というよりも共に生活している仲間という気持ち強い
- 12 親の期待や思惑にとらわれず、のびのびした人生を子どもに送らせたい
- 13 子どもがどんどん成長して一人前になっていくことは嬉しいことである
- 15 親が子どものためと思ってすることが、本当に子どものためになっているか疑問である

(3)手続き

- ① 質問紙は本人用（学生）と母親用（学生から見た母親）
- ② 授業の中で3枚冊子の質問紙を20分間で回答してもらった。

3)期間

平成6年11月21～29日

3 結果

1)短大生の母親役割観

短大生の母親役割観の調査結果を表1に示す。()内はSD

表1の結果より「赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である」全体平均 4.1(0.7)「子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる」全体平均 4.1(0.6)と最も高い平均値を示し、次いで「妊娠は女にとってすばらしい出来事である」全体平均 4.0(0.7)「子どもがいることで、家庭生活はより楽しくなる」全体平均 4.0(0.8)であった。これは妊娠や出産は女にとって特権であり、子育てを通して自分の成長につながり家庭生活においても子どもの存在の必要性を感じている。

(表1) 短大生の母親役割観の結果

N=119

項 目	全 体		看護 科 学 生		文化 教 養 科 学 生		t 検 定
	MEAN (SD)	(SD)	MEAN (SD)	(SD)	MEAN (SD)	(SD)	
1 妊娠は女にとってすばらしい出来事である	4.0 (0.7)		4.2 (0.6)		3.9 (0.8)		*
2 赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である	4.1 (0.7)		4.2 (0.6)		4.0 (0.8)		
3 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである	1.5 (0.8)		1.9 (0.8)		1.1 (0.8)		
4 赤ちゃんを産んでからはじめて、子どものかわいさがわかる	3.2 (1.0)		3.0 (1.1)		3.4 (1.0)		
5 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみもがまんできる	3.5 (1.0)		3.6 (0.7)		3.4 (1.1)		
6 女だけが妊娠やお産の善勞をするのは、不公平である	3.1 (1.0)		3.2 (0.9)		2.9 (1.1)		*
7 女は子どもを産むことで、自分が生きた証を残すことができる	3.0 (1.0)		3.1 (1.0)		2.9 (1.1)		
8 どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである	3.2 (1.0)		3.2 (0.9)		3.3 (1.0)		
9 予定していない妊娠の場合は、人口中絶もやむを得ない	2.8 (0.9)		2.9 (0.8)		2.7 (0.9)		
10 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである	2.9 (1.0)		2.9 (1.1)		2.8 (1.0)		
11 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができ	2.8 (1.0)		2.9 (1.0)		2.8 (1.0)		
12 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらなければならない	3.8 (0.8)		3.8 (0.7)		3.7 (0.8)		
13 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である	3.0 (0.9)		3.0 (0.9)		2.9 (0.8)		
14 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる	4.1 (0.6)		4.2 (0.6)		4.0 (0.6)		
15 わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである	3.4 (0.8)		3.4 (0.7)		3.4 (0.8)		
16 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない	2.4 (0.9)		2.5 (1.1)		2.3 (0.8)		
17 子どもがいることで、家庭生活はより楽しくなる	4.0 (0.8)		4.1 (0.7)		3.9 (0.8)		
18 育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である	1.6 (0.7)		1.7 (0.7)		1.5 (0.7)		
19 わが子の成長をみとどけるために、長生きをしなければならない	3.5 (0.9)		3.6 (0.8)		3.4 (0.9)		
20 母親がわが子を自分の一部だと感じるのには当然である	3.5 (1.0)		3.4 (1.0)		3.6 (1.0)		*
21 育児に追われていると、若さが早く失われる	3.0 (0.9)		3.2 (0.9)		2.8 (0.9)		
22 わが子のためなら、自分を犠牲にすることができ	3.6 (0.9)		3.6 (0.9)		3.6 (0.9)		
23 子どもを育てるのは、生みの母が最良である	3.8 (0.9)		3.8 (1.0)		3.8 (0.8)		
24 育児から開放される時に、人間らしい自由な生活ができる	3.4 (0.8)		3.6 (0.7)		3.3 (0.8)		***
25 わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活に張りが出る	3.7 (0.8)		3.8 (0.7)		3.6 (0.9)		
26 育児に専念したいというのが、女の本音である	2.8 (0.9)		3.1 (1.0)		2.5 (0.8)		
27 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている	3.1 (1.0)		3.2 (0.9)		3.0 (1.0)		

* p<0.05 *** p<0.01

(表2) 短大生の母親の伝統的母親役割観の結果

N=117

項目	全体		看護科母親		文化教養科母親		t検定
	MEAN (SD)	(SD)	MEAN (SD)	(SD)	MEAN (SD)	(SD)	
1 妊娠は女にとってすばらしい出来事である	3.9 (0.7)	3.9 (0.6)	3.6 (0.8)	3.9 (0.7)	3.6 (0.8)		
2 赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である	3.8 (0.7)	3.9 (0.7)	3.8 (0.7)	3.9 (0.7)	3.8 (0.7)		
3 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである	1.1 (0.8)	1.0 (0.9)	1.0 (0.7)	1.0 (0.9)	1.0 (0.7)		
4 赤ちゃんを産んでからはじめて、子どものかわいさかわかる	3.4 (1.1)	3.3 (1.2)	3.6 (1.0)	3.3 (1.2)	3.6 (1.0)		
5 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみもがまんできる	4.0 (0.7)	4.0 (0.7)	3.8 (0.7)	4.0 (0.7)	3.8 (0.7)		
6 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは、不公平である	3.3 (1.0)	3.4 (0.9)	3.2 (1.0)	3.4 (0.9)	3.2 (1.0)		
7 女は子どもを産むことで、自分が生きた証跡を残すことができる	3.4 (1.0)	3.4 (0.9)	3.3 (1.1)	3.4 (0.9)	3.3 (1.1)		
8 どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである	3.3 (1.1)	3.2 (1.0)	3.3 (1.2)	3.2 (1.0)	3.3 (1.2)		
9 予定していない妊娠の場合は、人口中絶もやむを得ない	3.1 (1.0)	3.1 (1.0)	3.0 (1.0)	3.1 (1.0)	3.0 (1.0)		
10 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の義務である	3.2 (1.0)	3.1 (1.0)	3.3 (1.0)	3.1 (1.0)	3.3 (1.0)		
11 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる	3.4 (0.9)	3.5 (1.0)	3.3 (0.9)	3.5 (1.0)	3.3 (0.9)		
12 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらないほうがよい	4.1 (0.8)	4.1 (0.8)	4.0 (0.7)	4.1 (0.8)	4.0 (0.7)		
13 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である	3.4 (1.0)	3.3 (0.9)	3.4 (1.0)	3.3 (0.9)	3.4 (1.0)		
14 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる	4.0 (0.8)	4.0 (0.6)	3.8 (0.9)	4.0 (0.6)	3.8 (0.9)		
15 わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである	3.6 (1.1)	3.6 (1.0)	3.6 (1.1)	3.6 (1.0)	3.6 (1.1)		
16 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない	3.0 (1.0)	3.0 (1.0)	3.0 (1.0)	3.0 (1.0)	3.0 (1.0)		
17 子どもがいることで、家庭生活はより楽しくなる	4.1 (0.8)	4.2 (0.7)	3.9 (0.9)	4.2 (0.7)	3.9 (0.9)		
18 育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である	2.0 (0.9)	2.3 (0.9)	2.1 (0.8)	2.3 (0.9)	2.1 (0.8)		
19 わが子の成長をみとどけるために、取生をしなければならぬ	3.9 (0.9)	3.8 (0.8)	3.9 (0.9)	3.8 (0.8)	3.9 (0.9)		
20 母親がわが子を自分の一部だと感じるのには当然である	3.9 (0.9)	4.0 (0.8)	3.8 (0.9)	4.0 (0.8)	3.8 (0.9)		
21 育児に追われていると、若さが早く失われる	2.9 (1.0)	3.0 (0.9)	2.6 (1.1)	3.0 (0.9)	2.6 (1.1)		
22 わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる	3.9 (0.9)	3.9 (0.9)	3.8 (1.0)	3.9 (0.9)	3.8 (1.0)		
23 子どもを育てるのは、生みの母が最良である	4.0 (0.8)	4.0 (0.8)	4.2 (0.8)	4.0 (0.8)	4.2 (0.8)		
24 育児から開放される時に、人間らしい自由な生活ができる	3.2 (0.9)	3.3 (0.9)	3.0 (0.9)	3.3 (0.9)	3.0 (0.9)		
25 わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活に張りが出る	3.7 (0.8)	3.7 (0.7)	3.6 (0.9)	3.7 (0.7)	3.6 (0.9)		
26 育児に専念したいというのが、女の本音である	3.0 (1.0)	3.2 (0.9)	2.8 (1.0)	3.2 (0.9)	2.8 (1.0)		*
27 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている	3.4 (1.0)	3.6 (0.9)	3.3 (1.1)	3.6 (0.9)	3.3 (1.1)		

* p < 0.05

その反面、「子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない」が全体の平均 2.4(0.9)と最低であり、次いで「女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる」が全体の平均 2.8(1.0)「育児に専念したいというのが、女の本音である」が全体の平均 2.8(0.9)、「子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである」全体の平均 2.9(1.0)の順に低い平均値であった。これは子育てが女の生き甲斐であることや女の義務であることに対する意識が低いことを意味している。

2)短大生とその母親の母親役割観の比較

短大生の母親の母親役割観の調査結果を表2に示す。()内はSD

表2の結果からは「子どもがいることで、家庭生活はより楽くなる」全体平均 4.1(0.8)最も高く、次いで「赤ちゃんを無事にうむためなら、どんな苦しみもがまんできる」全体平均4.0(0.7)「子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる」「子どもを育てることは、生みの母が最良である」全体平均 4.0(0.8)であった。これは出産や育児の経験を通して、家庭における子どもの存在の意味や子育てを通して得られる母親として女としての成長が体験から得られたことを意味している。

その反面、「子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない」「育児に専念したいというのが、女の本音である」が全体の平均 3.0(0.1)と低い平均値を示した。これは出産や育児が女性だけの役割と認識していないことを意味している。

表3 学科別母親役割の肯定傾向の比較

(平均値)

学科	看護学科		文化教養学科		全 体	
	学生	母親	学生	母親	学生	母親
肯定	3.4	3.6	3.3	3.6	3.4	3.6
否定	3.3	3.4	3.0	3.2	3.1	3.3
合計	3.3	3.5	3.2	3.4	3.3	3.5

表3の結果からは学科別に学生と母親の母親役割の肯定・否定の平均値を比較した結果看護学科と文化教養科の学生・母親ともに有意差はみられなかった。

3)短大生の母親役割観と子どもへの感情

(1) 学科別の子どもへの感情

表 4 学科別の子どもへの感情

(平均値)

表 4 に示すように学科別の子どもへの感情(密着・自立)の平均値からは看護学科と文化教養学科の有意差は認められなかった。

学科 項目	看護 学生	文化 学生	全体
密着	2.95	2.90	2.92
自立	1.72	1.73	1.73
全体	2.45	2.43	

(2) 学生の母親役割の肯定的傾向と子どもへの密着傾向

表 5 に示す「学生の母親役割の肯定的傾向と子どもへの密着傾向」では母親役割の肯定的傾向が高く、子どもへの密着傾向の高い学生は43名(37%)であり、逆に母親役割の肯定的傾向が低く、子どもへの密着傾向の低い学生は39名(33%)であった。母親役割の肯定的傾向の高い学生は子どもへの密着傾向も高い傾向を示し、逆に、母親役割の肯定的傾向の低い学生は子どもへの密着傾向も低いことがわかった。表 5 学生の母親役割の肯定的傾向と子どもへの密着傾向も低いことがわかった。

表 5 学生の母親役割の肯定的傾向と子どもへの密着傾向

表 6 学生の母親役割の否定的傾向と子どもへの自立傾向

		子どもへの密着傾向			合計
		密着 肯定	高	低	
母 親 役 割	高	43 (37)	19 (16)	62	
	低	16 (14)	39 (33)	55	
	合計	59	58		

		子どもへの自立傾向			合計
		自立 否定	高	低	
母 親 役 割	高	36 (31)	26 (22)	62	
	低	19 (16)	36 (31)	55	
	合計	55	62		

単位=人 ()内=%

(3) 学生の母親役割の否定的傾向と子どもへの自立傾向

表6に示すように母親役割の否定的傾向が高く、子どもへの自立傾向の高い学生は36名(31%)であった。逆に母親役割の否定的傾向が低く、子どもの自立傾向の低い学生は36名(31%)であった。母親役割の否定的傾向が高く、子どもへの自立傾向の高い学生は出産や育児に束縛されずに自分自身の成長を求めており、子どもには一人の人間としての自立を考えていることを意味している。

4 考察

大日向²⁾の研究ではA世代は昭和初期に育児を担当した世代、B世代は昭和20年から25年までの第二次大戦後の混乱期に育児を担当した世代、C世代は昭和45年前後に育児を担当した世代。本研究では短大生の母親は大日向のA世代と同世代になり、短大生はC世代の子どもになるためD世代とする。D世代は昭和50～51年生まれ世代。

大日向は、育児についての評価や育児を自分自身の生活の中にどう位置づけるかに関しては、A世代が最も高く育児を評価している世代である。C世代は3世代のうちで最も低く育児を評価している。しかし、育児の意義をまったく否定しているのではなく、むしろ、「自分の生きがいは育児とは別である」「育児は私にとって喜びであり楽しみであるが、それだけでは満足できない」「育児以外の仕事や生きがいをもつことは、自分のためにも子どものためにも必要」「育児は女性の義務である」はC世代が18.4%にすぎず、A世代は56.0%と大きな開きがある。一方、育児期間中の心理は「自分が世の中に遅れてしまうという感じがする」「自分の関心が子どもばかりに向いて視野が狭くなるを感じる」がC世代は49.0%に対して、A世代は16.0%と低値を示している。

本研究では短大生の母親(C世代)は「子どもがいることで、家庭生活はより楽しくなる」「子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる」が平均値4.1(1.0)と高値を示しているが、その反面「子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない」「育児に専念したいというのが、女の本音である」が平均値3.0(1.0)と最も低いことから、大日向のC世代と同じ傾向を示しているといえる。

大日向³⁾によればC世代は育児の意義をまったく否定しているのではなく、むしろ、自分自身の生きがいや生活を考えたとき、育児だけに専念できないという相対的な評価である。「自分の生きがいは育児とは別である」、「育児は私にとって喜びであり楽しみでもあるが、それだけでは満足できない。育児以外の仕事や生きがいをもつことは、自分のためにも子どものためにも必要と思う」という類の記述が多い。また、「育児は女性の義務である」との回答は、C世代は18.4%にすぎず、A世代の56.0%と大きな開きがある。C世代の回答には、「育児は女性だけの義務ではなく、両親や社会の義務である」と述べられている。

D世代は「赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である」「子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる」「妊娠は女にとってすばらしい出来事である」が平均値4.1(0.1)と高値を示したが、その反面「子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない」「女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる」が平均値2.4(0.9)と低値を示している。D世代は学生であるため妊娠、出産、育児経験がないことや育児体験の少ないこと。また、家庭環境や社会的環境の影響を多く受けており、特にマスコミュニケーションの影響を

多分に受けていると考えられる。D世代は妊娠、出産、育児は女にとてすばらしい出来事と思っている反面、育児の価値が女にとっての生き甲斐であると認識しているものが少ないことがわかった。

C世代を母親にもつD世代は育児以外の仕事や生きがいを持つことは、自分のためにも、子どものためにもなると考えているC世代の母親から育てられていることから、親の母親役割意識の影響を多分に受けていると考えられる。また、学校教育においては学業成績優先の競争社会、女性の高学歴化や社会進出は個人志向を高めた結果を生み、子産み規範の緩みが生れていることから、妊娠、出産、育児への価値観が低くなっている。

さらに、育児、家事を女の義務として教育されたA世代の80%に対して、C世代は36.7%であり教育の影響も多大であるといえる。

D世代には妊娠、出産、育児のすばらしさを学童期から伝えるとともに、この時期に育児体験を経験することが将来、母性の発達の基礎になることを認識させることが必要と考える。

参考文献

- 1) 花沢成一：「母性心理学」医学書院 1992
- 2) 大日向雅美：「母性の研究」川島書房 1990
- 3) 大日向雅美：「母性」新曜社 1991
- 4) 大日向雅美：「母性は女の勲章ですか」産経新聞社 1992
- 5) 馬場謙一 他編：「母親の深層」有斐閣 1990
- 6) 永野重史・依田 明 編：「母と子の出合」新曜社 1988
- 7) J・ポウルピィ・黒田実郎 他：「母子関係の理論」岩崎学術出版社 1978
- 8) 脇田晴子：「母性を問う」上下 人文書院 1990
- 9) 山口 真 他：「女性学概論」垂紀書房 1987
- 10) 新道 幸恵：「母性と看護」金原出版 1986
- 11) 柏木恵子：「父親の発達心理学」川島書房 1994
- 12) 船橋恵子：「赤ちゃんを産むということ」日本放送出版協会

[平成7年(1995年)10月30日受理]

